



第118図 欅状溝跡ブロック配置図

(3) S G 59出土土器と城輪柵跡周辺の 8 世紀～9 世紀の土器群

S G 59溝跡からは須恵器582点、あかやき土器983点が出土した。調査区中央部付近と北東付近からの4ヶ所から特にまとまって土器類が出土している。破損資料、破片資料が大半を占めるが、完形の坏も出土している。いずれも投げ捨てられたような状態で検出されている。

溝跡(S G 59)出土の土器は、その形態や製作の特徴、調整等から3グループに区分した。それぞれ中谷地Ⅰ・中谷地Ⅱ・中谷地Ⅲ群土器と設定する。中谷地Ⅰ群はS G 59のD地点からの一括遺物である。静止糸切り底部ヘラ調整の坏、ロクロ使用内部黒色処理された土師器坏、体部が直に立ち上がる須恵器坏、そしてハケメ調整の土師器甕が組成する。D地点から、やや離れたところから口縁部に櫛描き波状文の施された甕が出土している。

中谷地Ⅱ群はS G 59のA地点からの一括遺物である。須恵器で底部ヘラ切り坏、横瓶、あかやき土器の甕などが組成する。坏の体部はやや外反し、底径も若干小さい。中谷地Ⅲ群はS G 59のB地点からの一括遺物である。須恵器で底部切離しが回転糸きりの坏が見られる。また、黒色土器が組成する割合が高い。

これらの土器を理解するためにも、庄内地方北半における同時代の資料、特に酒田市城輪柵遺跡周辺から出土した土器群をもとに、8世紀～9世紀の土器群について考えてみる。

国指定史跡『城輪柵』周辺は、1970年代以降、ほ場整備等に係る発掘調査により、数十ヶ所に及ぶ奈良・平安時代の遺跡が調査されてきた。資料の蓄積によって、おぼろげながら

中谷地 I

俵田 V 層

俵田 IV 層・SD6I

土師器

須恵器
坏

高台付
坏



第119図 城輪柵跡周辺 8 世紀後半の土器変遷案

も当時の集落の様子や土器の様相が明らかにされ、幾つかの研究成果が報告されている。昭和59年（1984）庄内でひらかれた城柵官衛遺跡検討会で、古代出羽国の動向、城輪柵の構造、周辺集落について話し合いが持たれた。近年は、『山形県史・通史篇』や市町村史において、古代出羽国の主に政治的な動きについての研究成果が報告されている。

一方、東北地方における奈良・平安時代の土器研究としては、氏家和典（氏家1957）、岡田茂弘・桑原滋（岡田・桑原1974）、白鳥良一（白鳥1980）らのすぐれた研究があげられる。一般的に底部切離し静止ヘラ切り・ヘラ切りから糸きりへ、ケズリ調整は有から無へ、法量では底部が小さくなる変遷の方向で考えられている。山形県内の奈良・平安時代の土器群研究も、当初は宮城県側資料や研究上の知見と比較する方向で進んだ。近年、仲田茂司（仲田1994）は、東北地方におけるロクロ土師器の受容と展開についてまとめられ、ロクロ土師器は、8世紀後半を中心とする時期と須恵器にかわって食膳具の主役となる10世紀前葉を中心とする時期に大きな画期があると指摘された。

山形県内の奈良・平安時代の土器については、佐藤庄一により、遺構内一括出土土器を基にした土器編年が示された（佐藤1983）。また同じ頃、渋谷孝雄・阿部明彦らは新潟県や富山県出土土器との比較から変遷や年代について論じている（渋谷・阿部1983）。その後、阿部明彦は8世紀代の須恵器や非ロクロ使用土師器甕・あかやき土器杯について新知見を追加された（阿部1985）。1988年には、秋田の船木義勝らが山形県内の須恵器窯跡出土の杯類の分類や法量分析から、3期に大別した（岩見・船木他1988）。この中でⅠ期（8世紀前葉～8世紀中葉）Ⅱ期（8世紀後半～9世紀中葉）Ⅲ期（9世紀後半～10世紀後半）に区分し、酒田市願瀬山4号窯はⅡ期に位置づけている。1996年、斉藤俊一は、墨書土器の集成と須恵器ヘラ切り杯の分布や分類から8世紀から9世紀の土器の再検討を行っている（斉藤俊一1996）。さて、8世紀から9世紀の土器について、これまでの調査研究で明らかになっている点を整理すると以下のようにまとめることができる。現時点で、もっとも古い土器群は、俵田遺跡Ⅴ層出土土器群である。俵田Ⅴ層（SM60祭祀遺構下）からは、国分寺下層式の土師器杯・甕と須恵器蓋で宝珠形の爪を有するもの・体部が急に立ち上がるもので底部の大きい坏類などが伴出し、8世紀後半の年代が想定されている。同じく溝跡（SD61）からの一括遺物は8世紀末～9世紀初頭に相当するもので、無遺物層を挟んで、Ⅱ～Ⅲ上面（SD202・SX22）の土器群（9世紀後半）へと層位的な変遷が追える。また、8世紀後半の窯跡出土資料として遊佐町剣龍神社西窯の土器群が注目される（斉藤俊一1996）。続いて、9世紀前半の土器群としては、酒田市上ノ田遺跡（佐藤他1982）の溝跡（SD401）があげられる。佐藤庄一により、庄内地方第Ⅰ期として設定された一括資料で、須恵器が80%、あかやき土器が18.2%を占める。ヘラ切り坏が主体を占めるものの、糸きり坏が出土しており、併存することを指摘している。ここでは横瓶が出土している。

そのほか八幡町沼田遺跡（SD331）からは、227点の土器が出土したが、須恵器の割合が高い。蓋は宝珠形に名残りを残し、坏はすべてヘラ切り無調整で底から体部にかけてやや丸みを持つ。9世紀前半頃と想定されている。酒田市南興野遺跡（SD55）からは多数

の土器や木製品が投げ込まれた状況で検出され、良好な一括資料がある。須恵器坏には、墨書土器が多い。ヘラ切り坏が大半であるが、少量糸きり坏が伴う。9世紀前半に位置づけられている。その他、平田町桜林遺跡や西田遺跡・酒田市生石2遺跡などからも、まとまった土器群が得られている。土器群の変遷は、基本的に明確な層位的上下関係や遺構切り合いに裏づけられた一括遺物を検討資料とすることによって、慎重にかつ的確に解明されていく必要がある。8世紀後半から9世紀前半にかけては、次のような変遷を想定する。

表-33 城輪柵跡周辺における8世紀～9世紀の土器変遷案

8世紀後半		9世紀前半	
俵田遺跡Ⅴ層	⇨ 俵田遺跡S G61	⇨ 南興野遺跡S D55	沼田遺跡S D331
	Ⅳ層	西田遺跡S X22	上ノ田遺跡S D601
		桜林遺跡S D72	
中谷地Ⅰ		⇨ 中谷地Ⅱ	⇨
(剣龍神社西窯)		山楯5遺跡1号窯	願瀬山4号窯

俵田遺跡Ⅴ層段階は、国分寺下層式土師器を含み、非ロクロ甕や宝珠形把手の蓋・底径が大きい坏・断面V字状の高台をもつ坏など、新潟県北半での山三賀編年(坂井秀弥也1989)のⅠ～Ⅱ期に相当する土器群である。

俵田遺跡S G61、Ⅳ層段階はあかやき土器甕・堀が出現する。宝珠形蓋は、崩れていき、底径が大きいヘラ切り坏が多様な変異をみせる段階である。

沼田遺跡S D331段階は、少量須恵器の糸きり坏が出現する。ヘラ切り坏は、やや底径が小さくなり、底から体部にかけて丸みを持つ坏が見られる。この段階に横瓶が組成するケースが多い。

中谷地遺跡S G59出土土器は、以上の3段階中、俵田Ⅴ層段階か、それ以前に該当する資料と沼田S D331段階に該当する資料が見られる。それぞれ中谷地Ⅰ群・中谷地Ⅱ群と対比できる。

中谷地Ⅰ群は、俵田Ⅴ層と比較してみると土師器甕、高台付坏、波状文を持つ甕などと類似する点が見られる。ただ、静止切り坏やヘラ切り土師器坏が組成することを考えるならば、俵田遺跡がⅤ層よりも若干古い段階と推測しておく。須恵器坏の法量を比較するならば、剣龍神社西窯資料により類似性が見い出される。中谷地Ⅰ群土器に類似する資料を県外に探すと秋田県末館Ⅰ窯跡出土の坏群に近似する。末館Ⅰ窯跡の土器群の年代については、岩見誠夫・船木義勝らによって考察が加えられ、8世紀中葉と位置づけられている。また、新潟県新発田市山三賀遺跡出土第Ⅰ期土器群にも近い。山三賀第Ⅰ期土器群は非ロクロの土師器甕やロクロ使用土師器が組成の主体で、須恵器の相対的割合は少ない。須恵器は食膳具が大半を占めるといえる。福島県新鶴村大久保窯跡B1窯跡では回転ヘラケズリ再調整、ヘラ切り後ナデ調整の坏など山三賀Ⅰ期に相当する資料が出土しており、8世紀中

葉と位置づけられている。中谷地遺跡でみられた台部が断面「V」字状になる高台付坏は、新潟県・富山県などでは8世紀段階の高台付坏の特徴に見ることができる。また、宮城県の事例では、国分寺下層新段階の土師器にロクロ調整ヘラ切りの黒色土器が出現しており、中谷地Ⅰ群のロクロ土師器もその範疇に位置づけることが可能である。以上の様相を考慮すると中谷地Ⅰ群土器は、俵田Ⅴ層以前、絶対年代で8世紀中葉頃と捉えておきたい。8世紀中葉と言え、出羽国が建国されて間もない時期で、733年(天平5)には出羽柵が秋田城へ移転している。秋田城跡第54次調査S G 1031の第45層～50層出土土器群(8世紀後半期)との比較がとめられよう。後続する俵田Ⅳ層・S G 61段階に相当する窯跡として山楯5遺跡窯出土一括資料があげられる。報告書によれば、窯内であかやき土器甕・埴も焼成されていること、少量ながら杉葉模様の硯台が生産されており8世紀中葉～末の時期と報告されている。ただ、坏形態は、沼田遺跡や西田遺跡例に類似している。

中谷地Ⅱ群は、底径の大きい底部ヘラ切り坏が特徴的な土器群であり、横瓶が組成する。八幡町沼田S D 331や平田町西田遺跡S X 22・桜林遺跡S D 72などで同様な一括土器資料が得られている。窯跡では、酒田市願瀬山4号窯がこの時期の窯跡としてあげられ、秋田県では、葛法1・2号窯がこの段階に相当する(岩見・船木1988)。これらの土器群は岩見・船木編年では9世紀前半に位置づけられている。中谷地Ⅱ群もこの頃と思われる。8世紀末～9世紀前半は、延暦年間・弘仁年間にあたり城輪柵跡が国府として機能したと考えられている時期である。城輪柵跡出土土器群との比較が必要となる。

中谷地Ⅲ群は、須恵器坏は糸切りに代わり、あかやき土器・黒色土器が組成する割合が高い。渋谷孝雄(1989)による遊佐町下長橋遺跡での土器編年に対比すれば、9世紀後半から10世紀初頭の年代が相当する。

表一34 庄内地方の8世紀から9世紀初頭の動向

西暦	和 暦	政 治 的 動 向	遺 跡
708	和銅1年	出羽郡の建郡(『続日本紀』)	秋田城
712	和銅5年	出羽国の建国(『続日本紀』)	
733	天平5年	出羽柵の秋田高清水岡への移転 国府も移転したか。	
737	天平9年	大野東人の軍、多賀城から雄勝へ進軍	
760～	天平宝字以降	続けて百済王が出羽国守になる。	
785	延暦4年	百済王 英孫 出羽守になる。(『続日本紀』)	
804	延暦23年	秋田城の停廃 河辺府の保持が強調される。 出羽国府の南遷(『日本後紀』)	
830	天長7年	出羽国北部大地震 秋田城の壊城(『類聚国史』)	城輪柵跡説
			沼田 西田